

# 保育実践における「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

## — 保育者への面接調査とドキュメンテーションの分析をもとにして —

“Supposed Images of Children By the End of Childhood” in Early Childhood Practice:

Based on Analysis of Interview for Teachers and Documentations

谷口 聖・浅井 拓久也

### 要旨

本研究の目的は、保育所保育指針等で規定されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が保育実践の中でどのように見られるかを明らかにすることであった。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は保育の方向性を示しているとされている。保育実践の中でそれらの姿がどのように見られているのかを示すことで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」という保育の方向性を意識した保育実践の在り方を考えるきっかけになると思われる。本研究では、保育者への面接調査と、保育者が作成した保育記録であるドキュメンテーションを分析した。その結果、園の実践を記録したドキュメンテーションから「10の姿」の内容が達成され、加えて日々の保育や教育の中で「10の姿」を意識し、育むことが重要であり、保育者の援助が極めて重要であることも示唆された。

キーワード：保育実践、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、面接調査、ドキュメンテーション

### 1. 問題意識と課題設定

2017年に保育所保育指針等、3法令が改定（改訂、以降は改定と統一して表記する）・告示された。3法令改定の背景には、子どもや子育てを取り巻く環境の変化や乳幼児教育に関する研究の進展がある。保育利用率の増加、特に低年齢児の保育利用率の増加によってこれまで以上に低年齢児に対する保育が重要になり、乳児保育や3歳児未満の保育に関する記述が増加した。また、幼稚園では教育課程に係る教育時間後も園で過ごす子どもが増加していることから、いわゆる預かり保育においては家庭や地域社会の中での体験を補ったり教育課程の内容との調整を図る等、その内容をこれまで以上に充実させることが示された。さらに、国内外の様々な研究によって、乳幼児期には自制心ややり抜く

力等の非認知的能力が著しく伸びることが明らかとなっている<sup>1)</sup>。非認知的能力は社会情動的スキル等とも言われ、人生の成否に影響を及ぼす能力として注目されている。保育所保育指針でも「乳幼児期における自尊心や自己制御、忍耐力といった主に社会情動的側面における育ちが、大人になってからの生活に影響を及ぼすことが明らかとなってきた」と示されている<sup>2)</sup>。

このように、本次改定では様々な改定がなされたが、最も大きな改定が「乳幼児期に育てたい資質・能力」（以降、「3つの資質・能力」）と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以降、「10の姿」）である。「乳幼児期に育てたい資質・能力」は、豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」、気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」、心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」である<sup>3)</sup>。これらは乳幼児期の保育や教育で育む資質・能力を明確にし、かつ就学後に育む資質・能力との連続性を明確にしたものである。「10の姿」は、健康な心と体、自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現である<sup>3)</sup>。これらは5歳後半までに「3つの資質・能力」が育まれている場合の子どもの具体的な姿とされている。

本次改定でこうした新しい考え方が示されたのは、これらがこれまでの保育や教育では十分ではなかった箇所や視点を補完し、その質が向上すると考えられているからである。特に、「10の姿」については、「保育所の保育士等は、遊びの中で子どもが発達していく姿を、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を念頭に置いて捉え、一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり必要な援助を行ったりするなど、指導を行う際に考慮することが求められる」と示されており<sup>4)</sup>、日々の保育や教育の中で意識することが保育者に求められている。つまり、保育や教育の方向性として活用することが想定されている。もちろん、3法令は最低基準を定めたものであり、各地域・園の実情を踏まえて実践が展開される。それゆえに、これらの考え方や取り入れ方は園によって様々であることは言うまでもない。

そこで、本研究では、ある認定こども園の保育実践を取り上げて、保育所保育指針等で規定されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が保育実践の中でどのように見られるかを明らかにすることを目的とする。先に述べたように、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は保育の方向性を示しているとされている。そのため、保育実践の中でそれらの姿がどのように見られるかを示すことによって、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」という保育の方向性を意識した保育実践の在り方を考えるきっかけになると思われるからである。

## 2. 研究方法

本研究で取り上げる保育実践は、愛媛県にある1つの幼保連携型認定こども園の保育実践とした。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は各月齢の積み上げによってみられるようになることから、どの月齢やクラスでも常に意識することが欠かせない<sup>4)</sup>。そのため、全クラスの保育実践を対象とした。これらの保育実践は、2020年6月から2021年6月までのものとした。

また、コロナ感染症対策のため、園の関係者ではない者が高頻度で保育実践を観察することは難しいという現状から、保育者への面接調査と保育者が作成したドキュメンテーションという保育記録から保育実践を取り上げた。ドキュメンテーションは保育者の保育を写真等で保育の内容をわかりやすく可視化した記録であり<sup>5)</sup>、それゆえに実際に行われた実践を読み取りやすいことから、ドキュメンテーションを使用した。この認定こども園では、5年前から各クラスの担任保育者が保育の記録として毎月1つずつドキュメンテーションを作成している。ドキュメンテーションとして取り上げる保育実践は担任保育者に委ねられており、ドキュメンテーションは園内の保育実践を伝えるために保護者に配信されている。

## 3. 倫理的配慮

調査目的と内容、面接調査の回答やドキュメンテーションは本研究の目的に限って使用すること、面接調査への回答は自由意志によること、回答は途中で放棄することができること、本調査で得たデータは一定期間経過後に適切な方法で破棄すること等について、調査実施前に執筆者の1名が園長や保育者に説明し同意を得た。

## 4. 結果と考察

### (1)-1 事例1「栽培を通して感じたもの」

対象：5歳児 作成者：S先生 作成日 2020年6月3日（水）

事例1は、5歳児の保育活動の事例である。

保育のねらい：トマトの栽培に期待を持ち、自分のできることを考える。

写真1「トマトを栽培する幼児たち」



### ●保育の振り返り

トマトの栽培が始まり、日に日に大きく育っていく姿を楽しみにしている毎日です。トマトの実がすぐにつき順調かな？と感じていたある日、実が落ちていました。見つけたのは男の子たち。「あーと残念そうな声が聞こえてきました (1)」。私は3年前に年長組を担当した時にも同じ経験をしました。その時はショックで上手く子どもたちをフォローできなかったことを思い出しました。今回は子どもたちに自然に落ちてしまうことも鳥が来てつついてしまうこともあるんだよ (2) という話をしたところ、どの子ども真剣に私の話を聞いていました (3)。誰かのせいにするのではなく、これからどうするかを子ども達と一緒に考えました (4)。まだまだ実がなると思うから、大切に育ててみよう！楽しんで栽培しよう！もっと観察してみよう！と期待を持たせた日となりました (5)。その後落ちることはなくなりましたが、トマトのお尻が黒くなってしまい、なかなか赤くならず、試行錯誤の毎日ですが子どもたちと楽しみに栽培していきたいです。

### (1)-2 事例1 考察

本事例は、6月の保育の一場面である。5歳児クラスではトマト栽培する姿があり、日々順調に育つ様子を観察していた。この日の保育ではトマトの実が落ちている様子を目撃した年長組の子ども達はどうするのかを皆で考えを共有している様子があり、担任保育者はトマトの実がまだ残っているため大切に育てていこうと提案した。

本事例では、幼児が主体的にトマトの栽培を進める様子が窺え、「『あー』と残念そうな声が聞こえてきました」(下線部(1))とあるように、子どもが自然の不思議さに触れて感動する体験を通して、自然の変化を感じとっていることがわかる。この実践を行った保育者への面接調査では、担任保育者は導入として昨年から5歳児のトマトの栽培を観察しており、その様子を観察することで好奇心や探究心を引き出していたこと、絵本の読み聞かせや図鑑でトマトについて調べることで子どもたちのトマトの栽培に対しての興味・関心を引き出していたことを挙げていた。また、「トマトが自然に落ちること、栽培活動を通して自然の不思議さを感じることやトマトに対する愛着を育む」ことで、子どもが自然現象などに好奇心や探究心を持って関わられるように工夫していた。

「自然に落ちてしまうことも鳥が来てつついてしまうこともあるんだよ」(下線部(2))とあるように保育者が子どもの想像力を育んだり、見通しを持って行動すること、また子ども同士や子どもと保育者が対話したりするためのきっかけを作っていることがわかる。実際に「どの子ども真剣に私の話を聞いていました」や「誰かのせいにするのではなく、これからどうするかを子ども達と一緒に考えました」や「大切に育ててみよう！楽しんで栽培しよう！もっと観察してみよう！と期待を持たせた日となりました」とあるように子どもの試行錯誤や対話、次への見通し、協同性を引き出すことができている様子が窺える(下線部(3)(4)(5))。この実践を行った保育者への面接調査では、「子ども達自身で気づいたり、考えたことを言葉にすること」を特に意識していたことや、「トマトを育てる過程でたくさんの情報が必要となってくるため、クラス内で共有したり、グループになって活動し、ともに

考える」ことを意識することで子どもの協同性や思考力、対話を引き出していたことを挙げていた。また、まだまだ実がなるトマトを大切にするためにはどうすればよいのかを考えるために、子どもの試行錯誤や次への見通しを持って行動する保育を意識していたことを挙げていた。

以上から、この保育実践から「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の「健康な心と体」、「自立心」、「協同性」、「自然との関わり・生命尊重」、「言葉による伝え合い」が育まれていく様子がわかる。

## (2)-1 事例2「友達と一緒にだと嬉しいね♪」

対象：4歳児 作成者：I先生 作成日 2020年7月4日（土）

事例2は、4歳児の保育活動の事例である。

保育のねらい：友達と一緒に活動していることを嬉しく感じる。

写真2「スリッパを並べる姿と水を大切に使用している姿」



### ●保育の振り返り

・6月に入り、さくら組さんはお友達の名前を少しずつ覚えてきたようで、よくお友達の名前が飛び交うようになりました。1学期に入ってから、トイレのスリッパを揃えることを「スリッパさんお家に帰りたいっていいよと思う」「まいごのまいごの♪スリッパさん♪」(1)等、口酸っぱく揃えて欲しいことを言っていた私に対して、ある時、A君が「スリッパの赤ちゃんお家戻れんって泣きよるけん入れてあげな」と揃えてくれる姿(2)が見られました。(私はその瞬間、今まで言ってきたよかったな……と心をホッくりさせてもらえました。)また写真にも写っているように、体の方向を入口から背中向きにしてスリッパのお家の中(線の囲い)に入れてくれるようにもなりました(3)。また、水の使い方もスリッパを揃えたことで変化してきたのか、「蛇口のお水はね、川の水と山の水と海の水がなくなるけん止めとかなね」と子どもたち同士で水から関連づけて意識する言葉も聞かれ(4)、4、5歳児ならではの会話をこれからも大切に拾っていきたいと感じさせられた瞬間でした。これから言葉は知識としてどんどん吸収されていく活発な時期ですね。言葉遣いが今よりもっと発達していくと思います。次は、自分の知った言葉を大切に相手にお話するためにどうしたらいいのか、さくら組さんと一緒に話し合っていきたいなと思いました。

## (2)-2 事例2 考察

本事例は、7月の保育の一場面である。4歳児クラスでは徐々に友達同士の関係性が構築されている。この日の保育では4歳児がスリッパを自主的に揃えることができるように保育者が必要に応じて声掛けをし、スリッパを揃えることができるようになっている。また水の使い方についても自然と関連付

けながら大切に使用する姿がある。

本事例では、「『スリッパさんお家に帰りたいっていいよと思う』『まいごのまいごの♪スリッパさん♪』」(下線部(1))とあるように保育者が子どもの規範意識を育み、自分でしなければならないこと、保育者と子どもが対話するきっかけを作っていることがわかる。実際に「スリッパの赤ちゃんお家戻れんって泣きよるけん入れてあげな」(下線部(2))や「体の方向を入口から背中向きにしてスリッパのお家の中(線の囲い)に入れてくれるようにもなりました」(下線部(3))とあるように、スリッパをきれいに並べる体験を通して自分でしなければならないことを自覚するとともにきまりを守る必要性が分かり、物に対する思いやりの心を育てていることがわかる。この実践を行った保育者への面接調査では、「S市全体で取り組んでいる、市民一人ひとりの人権教育の心を育てるための5つの目標」のうちの1つである「他者への配慮を育む」ことを保育中に意識していた。幼児が園生活の中で「他者への配慮」を育むことや、「みんなで使うものの使い方やルールを自然と身に付ける」ように「スリッパさんお家に帰りたいっていいよと思う」「まいごのまいごの♪スリッパさん♪」と声かけすることによって、規範意識・道徳心を育むように工夫していた。また、スリッパを揃える線を作ることで、「スリッパのお家」を理解させ、「スリッパにも帰る場所がある」ことを幼児が認識し、「スリッパもお家に帰れるように並べよう」とする意欲を引き出し、物に対する思いやりの心や、ルールやきまりを守る必要性を育むように工夫した。

水の使い方もスリッパを揃えたことで変化してきたのか、「蛇口のお水はね、川の水と山の水と海の水がなくなるけん止めとかなね」(下線部(4))という姿から、道徳心や規範意識が育っていく中で、水という資源を大切に利用することで社会とのつながりなどを意識することや、自然への愛情や畏敬の念をもつ様子が窺える。この実践を行った保育者への面接調査では、子ども達が日頃から絵本やテレビなどで自然について知るなかで「なぜ」「どうして」という疑問に対して、「図鑑で知らればわかるかも」と声掛けし、気付きを与えることで、自然や社会に対しての知的好奇心や探究心を持って関わられるように工夫した。

以上から、この保育実践では幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「健康な心と体」、「自立心」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」、「自然との関わり・生命尊重」、「言葉による伝え合い」、「思考力の芽生え」が育まれていく様子がわかる。

### (3)-1 事例3「お当番をしてみて」

対象：3歳児 作成者：T先生 作成日 2021年2月19日(金)

事例3は、3歳児の保育活動の事例である。

保育のねらい：身のまわりのことを自ら進んで行う。

写真3「クラス内でお当番活動を進める様子」



#### ●保育の振り返り

・すみれ組さんで過ごす日々が短くなってきました。クラスみんなは新しいお友達ができることや進級することを楽しみにしています。そんな中で、来年度に向け最近ではグループ活動を行っています。以前からグループはあったのですが活動するのは最近で、友達の休みの確認や人数の確認、給食を聞きに行ったりをしています (1)。初めは声が小さかったりグループを忘れてしまったりすることもありましたが、だんだんと「今日はお当番」と意識をしたり、忘れていたりすると「お当番だよ」と教えてあげたりする姿 (2)も見られるようになってきました。そんな経験をすることで、自分がしなければならないことを意識したり、みんなのために何かしてあげようという気持ちが芽生えだしているかなと感じます。椅子を丸にして座る時も自分ができていても友達のために椅子を並べてあげようとしたりする姿 (3)や、前に立って発表しようとする姿 (4)も見られだしたりしています。恥ずかしさもあるけれど、やってみようという気持ちが表れているなど感じます。残り少ないすみれ組さんですが、来年度に向けても活動していきたいと思います。

### (3)-2 事例3 考察

本事例は、2月の保育の一場面である。クラスのお友達に親しみながら進級する喜びを味わいながら過ごしている。この日の保育では、3歳児が主体的にお当番活動を進める中で、お当番活動を忘れてしまうお友達に対して「お当番だよ」と声掛けする姿やお友達の分まで椅子を並べる様子がある。

本事例では、「友達の休みの確認や人数の確認、給食を聞きに行ったりをしています」(下線部 (1))とあるようにお当番活動を主体的に進める中で、自分のしなければならないことを自覚し行動する様子が窺える。また「だんだんと『今日はお当番』と意識をしたり、忘れていたりすると『お当番だよ』と教えてあげたりする姿」(下線部 (2))や「椅子を丸にして座る時も自分ができていても友達のために椅子を並べてあげようとしたりする姿」(下線部 (3))から自分のしなければならないことを自覚し、見通しを持って行動する中で相手の立場に立って行動するとともにそれを言葉で伝える様子が窺える。「前に立って発表しようとする姿」(下線部 (4))においても、自分の力でやろうとする気持ちを持ちながら、考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げようとする様子が窺える。この実践を行った保育者への面接調査では、「お当番活動の中で、友達の休みの確認や人数の確認、給食の献立などを聞くことが求められる」ため園生活の中でしなければならないことを保育者がモデルとして示すことで、次への見通しを持って生活する力を育めるように意識したことや、「園生活をより良くしていこう

とする姿を取り上げ、それをクラス内で共有する」ことで「園生活をより良く」しようとする意欲をさらに引き出し人の役に立つ喜びや道徳心を育むことを意識していたことが挙げられた。加えて、「自分の力だけで何かを達成するだけではなく、時にはお友達の力を借りることも大切」であり、「他者に助けてもらう体験」を踏まえることで共感能力、道徳心を育めるように工夫していた。

以上から、この保育実践では幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「健康な心と体」、「自立心」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」、「言葉による伝え合い」、「思考力の芽生え」が育まれていく様子がわかる。

#### (4)-1 事例4「そつ園制作～楽しかった幼稚園～」

対象：5歳児 かえで組・ふじ組 作成者：Y先生・S先生 作成日 2021年3月8日（月）

事例4は、5歳児の保育活動の事例である。

保育のねらい：卒園制作を完成する目的に向かってみんなで取り組む。

それぞれの思いやイメージを表現して楽しむ。

写真4「飛沫防止用アクリル板を制作する様子」



#### ●保育の振り返り

子ども達の身近のものとなった飛沫防止用のアクリル板。年長児最後の松岡先生とのアートは、このアクリル板を使い、幼稚園で楽しかったことを絵に描き表現を楽しみました。グループで何を描くかを相談し、それぞれテーマを決め下絵を基に制作をしました。今回使ったのはアクリル絵の具、乾くと耐水性になるのが特徴です。子ども達もいつもの水彩絵の具と違う表現ができることも面白く、夢中でパレットに絵の具を出していました(1)。みんなで何かを作ることは経験していましたが、あるグループでは友達作品に重ねてしまったり、友達が描いたものに追加したりしてしまいましたが、みんなで考え、試行錯誤しました。保育者は描きたい表現をしたい気持ちを十分に受け止め、子ども達と相談しながら完成に向けて進めていきました(2)。私達は子どものアイデアを生かす方法を松岡先生と相談し一緒に考え、それを子ども達に伝えてみると、沢山のアイデアが出てきました。「ここはこうしたら?」「この色の絵の具でお花になりそう!」(3)とみんなの意見がでてきます。楽しい活動となり、子ども達のイメージしたものが1つの形となり、みんなでやり遂げた達成感を感じられました(4)。

卒園式当日、ホールロビーに展示します。大好きな楽しかった幼稚園をテーマに子ども達の考え工夫した素敵な作品となっていますので、楽しみにしててくださいね。



#### (4)-2 事例4 考察

本事例は、3月の保育の一場面である。新型コロナウイルスの流行に伴い、子ども達は普段の園生活の中で、感染症対策の意識が芽生えていた。その中でも飛沫防止用のアクリル板は子ども達の身近なものとなっていた。この日の保育では子どもに感染症対策の意識が芽生えていることを踏まえて、飛沫防止用アクリル板を制作しようと提案した。

本事例では、保育者が子どもに飛沫防止用アクリル板制作を提案することで表現に関わる経験を積み重ね、楽しさを味わうきっかけを作っている様子が窺える。アクリル絵の具を使用することで子ども達も「いつもの水彩絵の具と違う表現ができることも面白く、夢中でパレットに絵の具を出す」(下線部(1))の姿から、普段使用する絵の具と比較する中で、性質や仕組みや特徴などを感じ取ったり、気付いたりしている。その様子に「保育者は描きたい表現をしたい気持ちを十分に受け止め、子ども達と相談しながら完成に向けて進めていきました」(下線部(2))や「『ここはこうしたら?』『この色の絵の具でお花になりそう!』」(下線部(3))と表現に関わる経験を積み重ねたり、思いを伝え合ったり試行錯誤したりしながら好奇心や探究心を持って関わる様子が窺える。また、「子ども達のイメージしたものが1つの形となり、みんなでやり遂げた達成感を感じられた」(下線部(4))の姿から、保育士等や友達の力を借りたり励まされたりしながら、自分の力でやってみようとする中で、考えたり、工夫したりグループで協力しながら、諦めずにやり遂げる達成感を味わう様子が窺える。この実践を行った保育者への面接調査では、「コロナウイルスの流行で飛沫防止用アクリル板も身近な存在となり感染対策に興味・関心が芽生えていることを踏まえて活動を構成し、園生活の最後の思い出を話し合いアクリル板に何を描くかグループでテーマを決めた。その上で話し合い工夫や試行錯誤しながら1つの物を完成させることや園生活の思い出を共に考え、イメージできるように」意識し、援助することで協同性や思考力、創造性を育むとともに、目標に向かって諦めずにやり遂げることができるよう工夫していた。また活動を進める中で「各グループでテーマを決めていたが、他のグループと重ね合わせた作品ができたり、テーマに沿っていない自分の好きな絵を各々描いてしまう出来事」が起きた。そのため「皆で協力して活動を進めることが大切であり、再度グループで決めたテーマに沿って描くことを意識付けるように声掛けをしたことや、その子どもの表現したい気持ちを受け止め大切にしながら、再度テーマに沿って加筆訂正すること」で、自分なりに表現することの楽しさを受け止めるとともに、皆で何かを成し遂げる達成感を味わえるように工夫した。

以上から、この保育実践では幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「健康な心と体」、「自立心」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「言葉による伝え合い」、「思考力の芽生え」、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」、「豊かな感性と表現」が育まれていく様子がわかる。

## 5. まとめと今後の課題

### (1) 本研究のまとめ

本研究は、保育所保育指針等で規定されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が保育実践の中でどのように見られるかを明らかにすることを目的とした。分析の結果、園の実践を記録したドキュメンテーションから日々の保育実践のなかで「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が育まれている様子が窺えた。保育者は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて捉え、保育実践の中で意識していくことが期待されている。しかしながら、保育者はそれを意識しながら保育実践を行ったわけではない。そのため「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をいっそう意識するためには記録を評価する際も「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識的に見つけようとする振り返りを行うことが欠かせない。また保育の振り返りの際に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から実践を再度読み直すことも忘れてはならない。

今後の課題として、保育者の保育年数に着目して比較検討していくことである。本研究では保育者の経験年数は問わないで分析してきた。しかし、保育の内容は保育者の経験年数によって変わってくる側面がある。そのため、一つ一つの実践を検討する際には保育者の経験年数を考慮に入れる必要がある。また、本研究で得られた知見を踏まえて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識した保育をどのように行うかという方法論の検討も必要であろう。保育所保育指針等では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保育の方向性として提示し、保育者がこれらを意識して保育をすることを求めている。そのため、記録を振り返って気が付くだけでなく、日々の保育の中で保育者が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識して保育ができるようにしていくことが重要である。そのためどのような方法が考えられるかを検討する必要がある。これらは今後の課題としたい。

### 引用文献

- 1) James J. Heckman (2015) 『幼児教育の経済学』. (古草秀子訳). 東洋経済新報社. (James J. Heckman.(2013) Giving Kids a Fair Chance. MIT Press)
- 2) 厚生労働省 (2018) 『保育所保育指針解説』.
- 3) 厚生労働省 (2018) 『保育所保育指針』.
- 4) 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領』.
- 5) 浅井拓久也 (2019) 『活動の見える化で保育力アップ! ドキュメンテーションの作り方 & 活用術』. 明治図書.